

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：34414

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K20000

研究課題名(和文) 私家集を中心とした十世紀ひらがな文学の研究

研究課題名(英文) An analysis of Japanese 10th century literature

研究代表者

荒井 洋樹 (Arai, Hiroki)

大阪大谷大学・教育学部・講師

研究者番号：40909777

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の実施により、十世紀歌人の個人歌集である私家集の研究を進展させる糸口を見いだすことができた。具体的には、光俊本『躬恒集』下巻の三代集から撰歌した部分を取り上げ、基盤となった三代集の伝本系統を明らかにするとともに、不遇な躬恒像を構築していることを指摘した。また、西本願寺本『公忠集』の構成についても研究に着手し、家集の描く公忠像を浮き彫りにした。これらの成果により十世紀歌人の私家集研究が推進されることが期待される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、近年やや停滞気味であった十世紀歌人の私家集を取り上げ、どのような分析が可能であるのかを模索・提示することを目的とした。光俊本『躬恒集』下巻は三代集を出典とすることは知られていたが、本研究ではその撰歌基盤となった三代集の伝本系統を明らかにすることで、作成時期を推測した。同時に本作の描く躬恒像と院政期における躬恒像がおおむね一致することから、これを裏付けた。私家集研究は自撰家集やそれに類するものが重視され、他撰家集、特に勅撰集から撰歌された家集は等閑視されてきたが、それを取り上げる意義を提示し、成果を査読誌に掲載できたことに本研究の学術的意義がある。

研究成果の概要(英文)：The achievement can evolve analyses of 10th century poetists anthologies “Shikashu”; collect waka poems. Specifically, it's made two analyses. First, I take “Mitsune-shu”; an anthology collected waka poem of ohshikouchinomitsune (凡河内躬恒). It consists of waka poems which record in Sandai-shu; “Kokin-wakashu” “Gosen-wakashu” “Shui-wakashu”. Research takes knowledge which is used manuscripts. If there is different each other between “Mitsune-shu” and Sandaishu, I analysis the different. Finally, I find “Mitsune-shu” characterize Mitsune misfortune. Second, I take “Kintada-shu”; an anthology collected waka poem of Minamotonokintada (源公忠). I analysis the character of Kintada in this anthology.

研究分野：日本文学

キーワード：私家集 中古文学 和歌文学

1. 研究開始当初の背景

かつて十世紀和歌の研究は和歌研究の中核の一つであり、多くの成果をもたらした。それらは私家集大成(明治書院)新編国歌大観(角川書店)『和歌大辞典』(明治書院)に結実することとなる。これにより、各作品の伝本系統の整理、ならびに、歌人の伝記研究はおおむね整えられ、現況は形成されたといえる。それ以降、和歌文学研究の中心は中世和歌へ軸足を移していった。

翻って、十世紀和歌の研究については、一九九〇年代以降、冷泉家時雨亭叢書の刊行で多くの資料が提示され、新編私家集大成が編纂されたものの、私家集大成で提示された伝本分類を根本から覆すようなものはなかったといつてよい。これは私家集大成までの和歌研究の妥当性を証するものである。

伝本の整理がついたものの、その次の段階への展開が思うように進んでいないのが現在の研究状況であると把握している。その理由としては、次の二点が大きな要因となると考えられる。

十世紀歌人の私家集は他撰とされるものが多く、歌人の製作意図まで還元しがたいこと。

三代集に収載される歌を蒐集しただけの家集もあり、資料的価値が認められていないこと。この課題を乗り越えることができれば、当該分野の研究を大きく進展させることができると考えた。

2. 研究の目的

上述のような状況下、報告者は十世紀歌人の私家集においてどのような研究手法が可能であるのかを考えた。乗り越えるべき課題としては、自撰ではない作品群において作品論をなす意義を提示すること、三代集など既存資料を基に作られた家集の価値を見いだすことの二点となる。本研究の目的はその基盤を形成するべく、モデルケースとなる論考を提示することである。

また、モデルケースとして提示する位置づけから、その成果は学会での口頭発表を踏まえた上で原稿化を行い、最終的な論文の発表は査読付きの学会誌であるべきだと考えて実施した。

3. 研究の方法

本研究は上述のとおり、伝本調査にある程度の蓄積がある作品が対象となる。従って、現況を形成するに至った諸論の蒐集・検討から着手し、その問題点を整理することから作業をはじめた。それを踏まえ、作品を精査し、それぞれの特質を析出して、理解を提示することになる。最終的にその作品が文学史的に持った意義を意識しながら位置づけることで、上述の目的を達することができる。

以下、既に公刊されている「光俊本『躬恒集』下巻試論」(『国語国文』九二 一 令和五年一月)に基づいて、研究手法について具体的説明を行う。

『躬恒集』の諸伝本はA～Eの五つのブロックといくつかの歌群の組み合わせで分類されている。このうち、光俊本『躬恒集』下巻はC部に当たる。現在に種類刊行されている『躬恒集』の注釈は、いずれもC部を持たない西本願寺本を底本としている。そうした事情もあって、C部は研究上あまり注目されてこなかったといえる。しかしながら、光俊本『躬恒集』下巻はなお残された問題が多く、これをモデルケースとして論を深めた。

光俊本『躬恒集』下巻は、三代集から歌を蒐集して形をなしている部分がある。勅撰集が主たる原資料とならざるをえない十世紀歌人の私家集としては変わった作りというわけではない。とはいえ、長らく研究的な価値を見いだされてこなかったのも事実である。

まず、出典となる三代集との突き合わせを行った。三代集は校本もある程度整っており、これを活用することで円滑に作業を進行することが可能である。結果、三代集いずれにおいても、現在の検索システムの底本となっている定家本系の伝本ではなく、非定家本系の本文を使用していることが明らかとなった。

さらに作品の改編や配列を検討することで、三代集の歌を蒐集しながら、官人として不遇な躬恒像を描こうとしていることを明らかにした。

このように一つ一つの調査を綿密に行い、証拠を積み重ねることによって、新たな知見を得る、というのが本研究の方法である。無秩序にそれを積み重ねるのではなく、全体を貫徹する俯瞰的な目的意識を持って積み上げた成果には、従来の視角では到達できなかったものが多く含まれている。

4. 研究成果

本研究によって、上述のような手法を用いて十世紀私家集研究のモデルケースを提示できた。その論文を査読雑誌に公刊できたことにより、研究手法の妥当性を証することもできた。むしろ、これは今後この分野の研究を推進する足がかりを構築したに過ぎない。しかしながら、今回の研究成果において示した研究手法をさらに他の作品に転用することで、十世紀私家集の動態をダイナミックに把握できるようになるはずである。現在、光俊本『躬恒集』に続いて、『公忠集』に関する論を構築している。目下、査読審査中であるため、詳述は避けるが、両論が揃うことによって本研究の意義はさらに高まるであろう。冒頭にも指摘したように、この分野の研究は伝本

系統の整理や歌人伝研究としては既に一定の到達点に達しており、新たな展開ができないでいた。本研究の成果はそこに大きな展開を可能にする視角を提供することができ、その価値は計り知れない。

本研究の成果を、適正に評価しようとするれば、今後この分野の研究がどれほど進展するのかを待たねばならない。さらなる研鑽に努めたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 荒井洋樹	4. 巻 92-1
2. 論文標題 光俊本『躬恒集』下巻試論 三代集からの増補部を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国語国文	6. 最初と最後の頁 18-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒井洋樹	4. 巻 復刊31
2. 論文標題 私家集 自撰 / 他撰論のゆくえ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 平安朝文学研究	6. 最初と最後の頁 40-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 荒井洋樹
2. 発表標題 光俊本『躬恒集』下巻試論 三代集からの増補部を中心に
3. 学会等名 和歌文学会関西例会12月例会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------